



## 「現場」という視点

経済学の傲慢には目にあまるものがあるが、新古典派経済学に異を唱えきたのが宇沢弘文氏である。そのキーワードとなっているのが「社会的共通資本」という概念で、分権的市場経済制度が円滑に機能していくためには実質的所得配分が安定的となるような制度的諸条件の存在が前提になるとする。これとは別に「現場」という視点からアベノミクスに物申している藤本隆宏氏の卓見にも注目したい。▼氏はVoice 1月号に「『よい現場』が成長戦略のカギを握る」なる一文を寄せ、企業と現場を区分しての経済成長論を展開している。「現代の企業は国境も産業も超える存在」であり、利益最大化を目的とする。これに対して「現場は、地域に埋め込まれた存在であり、自らの存続と雇用確保を目的関数とする経済主体」であり、異なる社会的存在だとしている。そして「現場は、一国経済の土台を支える『沈黙の臓器』であり、自らは大声で発言しない。黙々と存続の努力をするのみだ。」▼「失われた二〇年」といわれ、多くの分野で競争優位を失ってはきたが、中国や東南アジアでの賃金高騰に伴って、逆境に抗して能力構築を続けてきた優良現場は最悪期を脱しつつあり、「夜明け前」にあるとみる。「今の日本の産業、企業、地域に必要なのは、まさにそうした危機意識に支えられた希望だ」なるメッセージは、農業の世界への何よりの励ましでもある。

(土着菌)